
サーカスの夜 前編

文河綾女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サーカスの夜 前編

【Nコード】

N8792V

【作者名】

文河綾女

【あらすじ】

世界修復師の少年と書物の森を案内する少女が紡ぐ、異世界ファンタジー。魔法が失われつつある世界に渡り、禁じられた魔法を調査する二人。 作者個人企画『三題噺DE短編』第二弾！ 第一弾『黄金の絵語り』を先にお読みいただくと、もっと楽しめます。思ったより長くなってしまったので、前・中・後編に分けました。書きあがっているので、三日連続更新です！

天幕で囲われた、真つ暗な空間。

頼りない新月の光では、幕を透かしてはくれない。

隣の天幕では明々とした灯火が揺れている。

こちらが起きていることを気付かれてはいけない。

美しい絹の夜着に身を包んだ若い女は、手元も見えない中、筆を走らせる。

綴っているのは、手紙だ。

書きあがった手紙を折り、そこに細長い紙片を二枚添える。

封筒に認めた宛名は、この世界とは時空が異なる世界。

『魔法聖省ラズラード魔法学府様』。

封蝋を施した封筒を、魔法陣の上に乗せる。そして、入念に練習した呪文を唱えた。

それは転送の魔法。

きらきらと小さな光が弾け、手紙が書き消えた。

「お願い、助けて……。こんなの、もう嫌なの……」

悲痛な啜きが天幕の中で、闇に沈んだ。

迷宮探索の試験に落ちた。

少年の表情は暗い。少女のそれは苛立ちを隠そうともしていない。

少年の歳は十代後半。紺色の套衣をまとい、腰に大きな銀色の羽根筆を提げている。柔和な顔立ちで、快活だが真面目そうな雰囲気である。彼の隣に立つ小柄な少女は十代半ば。長く艶やかな黒髪で、深い碧眼には強い意志が感じられる。憂いのある美貌は、まるで人

形のようだ。彼女も同じく紺色の套衣をまとっているが、携えているのは自分の身長ほどの大きさの鍵である。

「『魔法曲芸団・『千年王国』？』」

深紅の魔女マルーシャ・ドローニナの執務机の上に、開けられた封筒、折り畳まれた便箋、そして『上得意様御招待券』と記された券が二枚置かれている。

「その曲芸団、調査してきて。それが再試よ」

「再試、ですか……？」

迷宮探索の試験は、主に筆記である。その再試が実働調査に代わるとは思えないのだが、高位魔女であり魔法聖省でも一目置かれるマルーシャのことである、何か考えがあってもおかしくない。

フュートは並べられた便箋を手にとった。

『助けてください。』

悪い魔法はもう使いたくありません』

とても短い手紙だった。

だがそれだけに、危機感を覚える。

「悪い魔法、ですか。では寮長は、禁じられた魔法が絡んでいると？」

「んー、そうは言わないけど。可能性はなきにしもあらず。だって今朝、結界外壁が崩れてたのよねえ。で、そこでその手紙を拾ったのよ」

「それって、めちゃくちゃあやしいと思うんですが……」

「だーから。行き詰まったフュートの息抜きがてら、調査もお願いねっ」

溜息混じりの少年と納得がいかない表情の少女は、赤毛の女に満面の笑みで送り出された。

半魔法世界。

それは、ほとんどの魔法は失われたが、ごく一部に魔法が残る世界。

魔法が脅威になることはないが、何かをもたらすこともない。そういう世界だ。

「……頭が痛い」

黒髪の小柄な少女が呟いた。

「珍しいな。時空転移で酔ったのか？」

「違うわ。あの人の部屋、真っ赤すぎて目がチカチカするのだもの」

「……ああ、だから、あの部屋に行くたびに機嫌が悪くなるのか」

前々から気付いてはいたのだ。マルーシヤの部屋にいる時のリリースヤはほとんどと言っていいほど口を開かず、話が終わればさっと部屋を出て行く。それはどうやら、視覚的不快感によるものだったらしい。

「ユキムラくん。街の名前、何だったかしら？」

「え？……ヴァーシュレードって書いてある」

「それなら、この街で間違いないわね。……変なおい」

ヴァーシュレード。魔法が失われつつあるこの世界では、機械工業の発展が目覚ましい。そのせいか、金属臭や煙が大気に流れている。

「すみません、『千年王国』っていう曲芸団を探しているんですけど、知ってますか？」

「いやあ……知らねえな。大体、俺たち庶民に曲芸団なんて娯楽は関係ねえんだよ。中央役場にある、貴族専用の観光案内所に行ってみたらどうだ。何かわかるかもな」

通りがかりの水売りは、親切にも中央役場の場所まで教えてくれた。お礼に水を二人分買ってもらえると、小さな飴玉をおまけしてくれ

た。

水売りに教わった通りの道を行くと、まもなく中央役場に着いた。建物の中は、職を求める者や相談にきた者でざわついていたが、観光案内所の区画だけは人気がない。朱色の縄で、完全に区画を分けているのだ。

「あの、すいません。この辺りに曲芸団が来てるってきいたんですけど」

「ああ、『千年王国』だね。来てるよ。……あんたたち、見たところ観光客だね？　ここは貴族様の案内所だよ。有料だからね」

案内所にいたのは、壮年の女性。商家の御婦人、ましてや貴族の御婦人という気立てではなく、どちらかというと職業婦人に近い印象だ。

「招待券でしたら、すでに持っております。わたしたちは、場所を知りたいだけなのです」

いつのまにか手にした招待券を少女がひらひらさせると、御婦人の目に『上得意様』の文字が映ったようだ。

「や、あんたたち！　若いのに一角の貴族様だったんだねえ。それなら……」

女性は、曲芸団『千年王国』の紹介小冊子と地図を出して説明を始めた。

『千年王国』は、ヴァーシュレードの東郊外で興業されており、美しき幻惑の歌手と蜘蛛の巣渡りの踊り子が花形であるらしい。歌はともかく蜘蛛の巣渡りという演目はよくわからない。

「とりあえず、行ってみた方がいいわね」

開演は日暮れ後となっていたが、調査をするなら開演前の方が都合が良い。上得意様御招待券ならば、舞台裏にも入れそうだ。

魔法曲芸団『千年王国』は、東の工場外を抜けた空き地に大きな天幕を立てていた。

観客入口は堅く閉ざされているため、天幕の裏側に回る。案の定、団員の一人に招待券を見せたところ、あっさりと舞台裏の天幕を開けてくれた。

賑やかな舞台裏。踊り子の足踏み、魔法で召喚された霊獣の鳴き声、投じられたナイフが突き刺さる音。

その中で一際目を引くのが、きらびやかな銀色のドレスを纏った金髪の美女。腰掛けた椅子の周りにはたくさんの花束や贈り物の箱が置かれている。

幻惑の歌手、アリア・ブルーメフェルト。その華やかさは彼女に違いない。

彼女の隣には高級な仕立ての燕尾服に青い仮面という不思議な出で立ちの男が立っている。馴れ馴れしく花形歌手に話しかけているところから、団のお偉方だろう。

「あちらは、団長のニコラウス・ブライプトロイよ」

二人の背後から、静かな声が掛けられた。

振り返ると、一人の女性が立っていた。踊り子の地味な練習着を纏っている。化粧気のない、だが整った顔立ちの女性。リユリーシヤに似通った、精巧な人形を思わせる無機質さを持っている。

「あ、どうも。お邪魔してます。ええと、あなたは……」

「わたしは、エンサラ。蜘蛛の巣渡りの踊り子です」

「小冊子に載ってましたね。エンサラ・パールさん。花形演目のひとつなんですよね」

「あなたたちも、アリアの歌を聴きに？」

「ええ、まあ。知り合いに招待券をもらったので」

「そう、そうなの……」

踊り子の表情が曇る。直感的に、この女性は何か知っているのかもしれないと思った。

注意深く観察するつもりで彼女を見つめると、彼女の視線はアリアとブライプトロイ団長に向けられていた。

不機嫌そうなアリアと、彼女の椅子にもたれ掛かるようにしてしきりに話し掛けている仮面の団長。

「恋人みただけけれど……違いそうね」

「……ええ。恋人ではないんですが……アリアさん、団長の元婚約者にそっくりなんです」

「元婚約者？」

「はい。拳式の前に、亡くなっただんです。彼女も、うちの団の歌手でした」

終始俯き加減で、小さな声を絞り出すようにエンサラは話した。

フットやリユリーシャとは目を合わせようとしないところが気に掛かる。

そうなんですか、と気のない返事をしながら、フットは差出人不明の手紙のことを考えていた。

「……そういえば。アリアさんて、どうして『幻惑の』歌手なんですか？」

「え、そ、それは……美しい声だからよ。歌い手の魅力はそこでしょう？ それに彼女、あれだけの美人だし……」

まるで自身を卑下するような眼差しで、美しき歌い手と仮面の紳士を見つめている。

「まあ、確かに。でも僕からしたら、エンサラさんだって美人ですよ？ それにー」

「エンサラ！ 何をやってる！」

低く響く怒声が浴びせられた。エンサラの肩がびくりと跳ねた。

長靴ちゅうかを勢いよく鳴らし、ブライプトロイ団長が近付いてくる。そして、乱暴にエンサラの手を引いた。

「あの、すみません、僕たちお邪魔でしたか……？」

青い仮面に素顔を隠した男は、威圧感だけでフットを後退させた。

「……お客様、そろそろ開演のお時間です。客席へとお回りください」
言葉は丁寧だが、その口調はどこか刺々しい。まだ掴みあげているエンサラの手首が、青白く見えた。ここは、立ち去るしかないだろう。

天幕を出ていく時に振り返ると、団長がエンサラを叱りつけているようだったが、その内容までは耳に届かなかった。

「ユキムラくんがしつこすぎたのよ」

観客席につくなり、ぼそりと言った。

「団員の身の安全を守るのは団長の務めよ。追い出されて当然だわ」
淡々とした口調で言われると、確かにエンサラに対して馴れ馴れしすぎたかもしれないと反省の念が心によぎる。

リユリーシャが普段このように彼を悪し様に言うことはほとんどないのだが、今日はどうも機嫌が悪いようだ。

「……っと、席が埋まってきたな」

いつの間にか、観客が増えて天幕内に熱気がたちこめ始めている。
「なあ、リユリ。手紙の差出人、誰だと思う？」

「さあ。ユキムラくんは、美女からもらったと思っているのじゃない？」

「美女って……確かに、エンサラさんがあやしそう」

「君たち、静かにしたまえ」

声を落としての会話のつもりだったが、隣席の紳士に咎められた。盛装し、従者をつれた壮年の貴族といった風情だ。

「すみません、もう始まるんですよね」

「まったく……これだから成り上がりは。いいかね、この曲芸団は、

貴族の間でもごく一部の者しか出入りできない特別なものなのだ。礼儀を弁わきまえたまえ」

「申し訳わけございません、おじさま。彼は少し無粋なのですわ。よろしければ、少しお話をきかせてくださいませんこと？」

ずっと静かに立ち上がり、リユリーシャは美しい微笑みを紳士に向けた。そしてフュートと場所を替わり、男の近くに腰を下ろす。

「ほう、美しいお嬢さんだ。君は私たちと同じ高貴な香りがするね。いいだろう、教えてあげよう」

「まあ、うれしいですわ。わたくし、この曲芸団は初めてなのですけれど、何か特別な演目でもあるのでしょうか？ 見たところ、観客は男性ばかり。若い方からお年を召された方まで。皆様、きっと貴族の方ですわね」

冷たい汗が背中を伝う。

確かにリユリーシャは小悪魔な性格の美少女だが、これほど甘つたるい口調で話すのは聞いたことがない。

「ああ。この『千年王国』は、現実世界と幻想世界との架け橋なのだ。美しい幻の世界へといざなってくれる」

「そう。わかりましたわ」
声の調子が変わった。会話を聞いていたフュートも、必死に思考を巡らせる。

次の瞬間、空気を割るような歓声が上がリ、舞台上の幕が開いた。「おおっ！」

隣の紳士もリユリーシャとの会話など忘れたように、舞台に釘付けになっている。

演目は、道化師からだった。そして、ナイフ投げや霊獣調教などがあり、舞台が転換される。

すると、舞台上と天幕の上部を繋ぐように幾本もの白い綱が絡めて張つてあるのがわかる。そこに、きらびやかな衣装を纏ったエンサラが現れた。

蜘蛛の巣渡りだ。蜘蛛の巣に見立てた空中の綱の間を、命綱なし

で飛び回り、舞うのだ。

その幻想的な雰囲気、観客からも大きな歓声上がる。

ほとんど落下というような速度で、それでも音も立てずに着地し、
エンサラはお辞儀をして観客の声援に応えた。

幕内が暗転される。周囲のざわめきが一気に引いていく。

そして、高く細い音が、空気に浸透し始めた。

歌声だ。

夢の終わりを知らぬ夜

幻は星を抱く

孤独は誰にも見えぬ檻

蝶たちは金色に散る

壊れた夜の宴よ

そなたの幻を繰り返せ

繊細で、よく通る美しい声。

まるで頭の中に直接響くようだ。

歌詞の意味を思えば、夢幻ゆめまぼろしに囚われてしまうほどに
。

(後書き)

お読みいただき、ありがとうございました。

中編、後編もお楽しみください。

三日連続更新です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8792v/>

サーカスの夜 前編

2011年10月8日20時54分発行